

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙
1面・みんなの教理入門(5)
2面・幸せを届ける言葉
3面・連載・おさしづの点滴
4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
 - 夕づとめ：毎夕・7時00分
 - 春季大祭：1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭：10月21日午後1時30分
 - 月次祭：毎月21日 午後1時30分
 - 春・秋季霊祭：3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の📍マーク。市立公民館の裏・西側です。



■全教一斉ひのきしんデー

4月29日、快晴の日和の下、全教一斉ひのきしんデーが実施されました。大阪狭山市は、教会北側に隣接する大阪狭山市戦没者慰霊斎場がその会場です。8時30分集合。遙拝の後、表統領の開催メッセージを代読させていただきました。除草など作業にかかり、11時に終了しました。参加者は、昨年は百名でしたので、それより若干少なく老若男女94名でした。

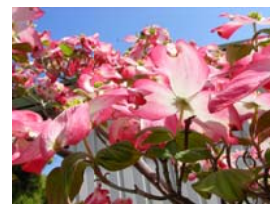
■天理青年躍進の集い

創立90周年を記念して「天理青年一手一躍進の集い」が、9月15日をかきりにグランキューブ大阪(大阪国際会議場)などで開催されます。

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

「みんなの教理入門」連載・5 信じる《すむ・わかる》

天理大学名誉教授・芹澤 茂



日常生活においては、心を働かしている人々と考えたり、物を言ったり、何かをしたりするときには、本来の心づかいのほかに、これに付随した余分な心づかいをしているのが普通である。この余分な心づかいがほりりと言われて、にちに常に払わなければならないものである。これには八つを教えられている。

をしい ほしい にくい かわいい うらみ はらだち よく こうまん

このほりりは間違った心づかいであるから、八つだけでなくもっと沢山あるのではないかと、ほりりはなぜでのかとか、いろんなことが考えられる。しかしこの「八つのほりり」という教理は、心づかいを議論しているのではなく、心のほりりを払う方法を教えられていると理解しておく方がよい。

「ほりりを払う」のは「心をすまず」(心をきれいにする)ためである。心をすまずための方法は、ほりりを払うだけで

《編集後記》

▼5月はじめに出す予定でほぼ完成していたのですが、雑事に追われて1ヵ月近く遅れてしまいました。▼その間、狭山池まつり、大阪府民生委員(方面委員)制度創設90周年記念・第60回大阪府民生委員児童委員大会に参加し、ジャーナリスト・大谷昭宏氏の講演(「みんなの命輝くために―セーフティネットとしての民生委員・児童委員活動―」を聴いてきました。▼みんなの命が輝くためのセーフティネットとしての民生委員制度に大きな期待を表明されました。この大会に相応しい記念講演でした。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご笑覧ください。http://sachihiro.com/#やまさんのブログ」から入れます。

さちひろ 第26号
編集兼発行人・山口 渡
平成20年5月28日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072-36512571

のではなく、誠心誠意、心から信じるのである。教理を心から信じて実践していけば、その教理によって教えられることが真理として実感されるようになるので、これが教理が本当に「わかった」ということである。

教理は、信じやすいように、わかりやすい説明がついている。例えば「かしまの・かりもの」の教理であれば、「人間のからだは親神様が人間に貸しているもの、人間が親神様から借りているものである」というように、人間同士の貸借（かしまり）の関係にたとえて説明されている。この説明を聞いて、なるほどそういうことか」と思うだけでは、説明が理解されたといいことが、信じられないように感じない。わかったという「かしまのもの」



かりもの」の真理がわかるためには、これを日常つねに信じていくことが必要なので、信じていけば、やがては本當にわかったということになる。

よく知られた譬（たとえ）で、「馬を水際まで連れて行けるが、水を飲まずことはできない」と言われる。水が水を飲もうとしなければ大変で、まず腹痛（せんつう）という死に至る病ではないかとみられる。

信仰の場合も、親神様のてびきによって信じられる心（すんだ心）にしてもらったのであるから、信じようと努力しなければならぬ。これが「真実を出す」ということで、真実・誠である。そこで次に、何を信じるのかをはっきりさせることが大事になる。これがはっきりしていれば、心づかいとして、何が本来の心づかいであるかということも、次第に明らかになる。

（せりざわ しげる）
この記事は、昭和59年に「天理時報」紙に連載されたものです。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

（善本社刊）から

心遣い

人は病気になる、苦しい病から一日も早く遁れたいと、気持ちがあせる。

しかし、この世には何事も、つりあつてのご縁がある。

「病の元は心から」というが、病に つりあう心遣いがあれば、

いつまでも病氣と仲良く暮らさねばならない。

病とつりあわぬ運命をつくるには、病を癒すことをあえるより、

与えられた病の元です、己の心遣いを、

改めることにある。

もしもして、心遣いを改めないで、

医薬だけで病は癒えても、後日、必ず病は再発する。

おさしづの点滴 (5)

澄み切りた容れ物

さあく何も分からん。その中より始め掛ける。澄み切りた容れ物と、泥水の容れ物と、皆々渡したで。濁りたる水を、今一時に澄ませようと思つても、澄ます事が出で。 (20・3・13)

【解説】

教祖が現身を隠されて後、飯降伊蔵が「仕事場」として親神様の思召を取り次がれました。そして明治二十年三月二十五日に「本席」に定められます。このおさしづはそれに先だつ四日から十七日までの一連おさしづの一部分

です。

「容れ物」とは心の器（うつわ）。「澄み切りた」「濁りたる」水とは、人間の心・心づかいです。何も分からないその中より始めかける、というお言葉は、三月四日のおさしづでも同様に宣言されています。存命のおやさまの顕著な働きを予言されたのであります。澄み切りた心の者と泥水のような濁った心の者がいます。「澄み切りた容れ物」心の者には、これまでからさづけた水を「今一時に」澄ませようと思つても、それはできるものではありません。長い年限をかけてはじめてなされるのであります。本席（となる者）の通つた道を思い浮かべればわかるでしょうと、論されているようです。

* * *

信仰とは、この器、空つぽの器のことで、器の中身は信じている（信じられている）内容（教え・教理）です。信仰を深めるといふのはこの器を大きく

くして、「いかなる理もみな映る」ように心を澄まし、中身がたくさん入るよう信仰の器を大きくすることです。しかし、それは「今一時に澄ませようと思つても、澄ます事が出で」で「と論じています。この「教えに基づく生き方」の「日々実行」が欠かせないので、そこを聞き分けよと論じています。

「おさしづ全文」

卷一 明治二十年三月十三日

（陰曆一月十九日）午後七時

御論

さあく何も分からん。その中より始め掛ける。澄み切りた容れ物と、泥水の容れ物と、皆々渡したで。濁りたる水を、今一時に澄ませようと思つても、澄ます事が出で。神が何を言うやらと思つてあろう。そうではない。見て居よ。一家の内でも同じ事渡してある。澄んだる容れ物には一つの印が渡してある。よう聞き分けよ。